

杉の子

奥多摩町立氷川小学校
学校便り 10月号
令和5年 9月29日発行



校章と先人の願い

主幹教諭 稲葉 義愛

本校は10月15日に150回目の開校記念日を迎えます。

この機会に本校の歴史を調べていく中で、今から50年前、創立百周年記念の際に、当時の森田晴男校長先生が書かれた文書から本校の「校章」の由来を見付けることができました。

【氷川の「氷」を中心に、氷の結晶とさくら、それを取りまく月桂冠によって校章が作られている。氷の結晶の白は清潔を、結晶は磨かれて鏡となるようにという願い、さくらは国花であり、花の王とされているところから、気高く、みんなから愛される立派な国民となれ、との願いを表している。月桂冠は優勝者の頭に載せ、称賛の意を表わすもので、もっとも名誉ある地位を示す。また、月桂樹の枝葉はよく繁茂し、葉、実ともに芳香があって、香水の原料ともなる。これらのことから、香り高く、人の頭となれ、そしてこの学校の卒業生であることに誇りをもち、大いに繁茂せよ、との願い。中心の文字「氷」には、「氷は水より出でて水より寒し。」ということばのように、これは、弟子が師にまさることのたとえで、しっかり勉強して、先生よりも親よりもさらに優れた人となれ、との願いが込められている。】

明治政府が国民皆学を目指して我が国初の近代的学校制度を定めた基本法令「学制」を發布したのが1872年（明治5年）ですので、その翌年に開校したことになります。開校までの早さ、校章に込められた願いなどから、氷川地区の先人たちが「教育」の重要性を捉え、崇高な理念をもって学校教育に力を注いできたことが窺えます。その想いをしっかりと受け継ぎ、次の世代につないでいかなければと身が引き締まる思いです。

20年ほど前の6年生の国語科の教科書に「百年前の未来予測」という教材がありました。百年前の人々が予測した未来が現在どの程度実現しているかを検証し、今から百年後の未来を自分なりに筋道を立てて予測する、という学習内容でした。百年前の人々の予想では、

- ・無線電信が発達し、世界各国の人と自由に話をするができるようになる。
- ・暑さ寒さを調整する新機械が発明される。

などの予測が根拠と共に示されており、教材を読みながら未来に希望を抱く先人たちの想いを感じました。学習のまとめとして、当時担任していた6年生と一緒に未来の学校を予測したのですが、

- ・計算などはコンピューターがするから算数はなくなっている。
- ・ロボットが代わりに学校へ行ってくれるようになっている。

など担任の指導力不足が理由か自分に都合のよい未来が多く挙がったことを覚えています。

学校へ代わりに行ってくれるロボットはまだいませんが、10年足らずで一人に1台の端末が配備され、オンラインで授業が受けられるまでになっています。「100年後」と想像した未来が、ずっと短縮されて実現する時代なのかもしれません。それこそ今から100年後を予想することは難しいですが、校章に込められた先人の想いをしっかりと受け継ぎ、気高く、みんなから愛され、この学校の卒業生であることを誇りに思う児童を育てるべく、地域、保護者の皆様と協力して教育活動に励んでまいります。